

ピリピ3章12-21節 「一心に走る者」

1A 上に召される栄冠 12-16

1B まだ捕えてない者 12-14

2B それぞれの到達点 15-16

2A 天にある国籍 17-21

1B 地上のことだけを考える者 17-19

2B 栄光の体 20-21

本文

ピリピ人への手紙3章12節からです。ピリピ3章から、「最後に」という言葉をもって、パウロがさらに話したい一つの大きな話題について話しています。それは、パウロにしても、誰にしても、過去にもっている「栄光」でした。パウロは、イスラエル人としても、またユダヤ教徒としても、非常にすぐれた経歴を持っていました。しかし、彼はこれらのものは、「私の主であるキリスト・イエスを知っていることにすばらしさのゆえに、いっさいのことを損とと思っています。(8節)」と言いました。主にある喜びが、ピリピ人への手紙の主題ですが、主を知っていること、主に結ばれていることの喜びが彼を支えていたのです。

そして、神からの評価また義については、自分自身の律法の行ないではないことを話しています。「9 キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。」自分がどれだけのことをやったか、ということではなく、自分がキリストの中にいるということ自体で、その関係の中にあることによって神に認められます。そして、神からの評価については、神が後に与えてくださるという望みがあります。そしてパウロが集中しているのは、キリストの復活の力にあやかることであり、キリストの苦しみの交わりを持ち、そこから神の生ける力を体験します。終わりに、文字通りの、死者からの復活を体験します。

1A 上に召される栄冠 12-16

そして12節に入っていきます。12節から16節には、一心に走るパウロの姿が描かれています。これまで話した、過去に成し遂げたことに頼らず、むしろキリストの内に見いだされたいという強い願いを、オリンピックの競技選手に例えています。パウロは、手紙の中でキリスト者の生活をいろいろな例えを使って説明していますが、一心に走る競技選手もその一つです。

1B まだ捕えてない者 12-14

12 私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。

パウロは、ピリピの教会の人たちにとって指導者であります。したがって、彼が靈的に神に認められた者、到達した者のようにみなしていたかもしれません。これはしばしば、クリスチャンの会話の中にも出てきますね。この人は、キリスト者についての心得を持っている。その基礎をしっかりとふまえている。私も、目標を立てて、それを成し遂げたら、到達したクリスチャンになれるのではないかと考えているかもしれません。しかし、パウロはきっぱりと、そうした考えを否定しています。「私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。」と語っています。

これが信仰によって生きる立場です。もし私たちが行かないことによって義を立てることができるのであれば、ちょうど学校や習い事のように、「私は二級を受かりました。今度は一級に挑戦します。」ということができるのです。靈的に、「この人はキリストに近づくのにここの段階まで来た。あの人はまだその段階に来ていない。」と語ることができます。しかし、信仰による義によれば、すべての人が同じ段階に置かれます。これまで過去に成し遂げたことは、積み上げることはできず、むしろ神の前では塵芥なのです。すべての者が「追求している」者になっていなければいけません。キリストによって、救いは保障されています。神を信じながら、この方との関係を育むために生きています。そして、褒美はキリストが戻って来られる時に与えられるのです。

私たちは、「ただキリストがおられるだけで満足です。」という満足を持つべきです。実に、キリストにあって完全な者になっています。それを、まだ不足であるかのように、神の前に認められるために動いてはなりません。むしろ、完全な救いを成し遂げられたキリストの御業に留まるべきです。しかし、主のその完全な救いの御業が、私たちの内に、そして私たちを通して現れることを神は望まれています。神は私たちを、ご自分の救いの御業の当事者にしようとされているのです。神は、私たちをご自分の命の水が流れていくその舞台にしたいと願われています。したがって、私たちがこの方に心を明け渡し、主が行われることに自分の意志を合わせていくことが必要です。ご自分の救いのすばらしさを、なおのこと、私たちを聖霊によって聖めていくことによって、キリストの似姿に近づけていくことによって成し遂げられます。そして、そのすばらしさを、まだキリストを知らない人々に、この世界に知らせようとして私たちを用いられます。

ですから、「私はある程度、キリスト者生活としては到達した。」と考えることは危険でさえあります。競輪選手が、途中でペダルを回すのをやめてしまうようなものです。ある程度、惰性で乗っていることはできるでしょうが、いつか倒れてしまいます。ダビデのことを思い出します。彼は王となり、周囲の国々と戦って屈服させていき、残るはアモン人を倒すだけでした。ところが、彼は戦いに自分自身は行かず、夕方まで宮殿にいて寝ていました。そして屋上に上がってみると、女が裸で自分の身を洗っていたのを見たのです。キリスト者生活は、前進しない時に後退します。

13 兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕えたなどと考えるはいけません。ただ、この一事に励んでい

ます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、14 キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標をみざして一心に走っているのです。

パウロは、すでに捕えられたのではない、と繰り返しています。そうではなく、「ただ、この一事に励んでいます」と言っています。これがパウロの示す信仰の姿勢です。一事に励んでいる、ということ。1章でも、「私にとっては、生きることはキリスト(21節)」と言って、自分がどこに思いを集中させているかを教えています。私たちは、いろいろ多くのことが必要だと思う傾向があります。何かクリスチャンとして取り組んでいる時に、あのことが必要だ、このことが必要だとあれこれ考えますが、それらも考えなければいけないのでしょうか、大事なものは多くありません。いや一つだけ、とイエス様は忙しくしていたマリヤに言われました(ルカ 10:42)。また、イエス様に目を開けていただいた、生まれつきの元・盲人は、宗教指導者からあれこれ質問されましたが、「あの方が罪人かどうか、私は知りません。ただ一つのことだけ知っています。私は盲目であったのに、今は見えるということです。(ヨハネ 9:25)」と答えています。そしてダビデはサウルから逃げている生活を送っていましたが、彼の思いは一つになっていました。「詩篇 27:4 私は一つのことを主に願った。私はそれを求めている。私のいのちの日の限り、主の家に住むことを。主の麗しさを仰ぎ見、その宮で、思いにふける、そのために。」自分を突き動かす情熱は一つなのです。

そしてパウロは、「うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み」と言っています。ここで、「うしろのものを忘れる」と言っているのは、その記憶を無くすということではありません。先にパウロは、自分が生粋のヘブル人で、律法についてはパリサイ人であり、その義については非の打ちどころはないと言いました。彼はここまで覚えていました。また彼は、テモテへの手紙第1章で、自分が過去に、「神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者でした。(13節)」と言っています。ですから過去の記憶を忘れることではありません。罪を犯していたという負の過去については、パウロは決して忘れることなく、むしろ「罪人のかしら(15節)」であるとまで言って覚えていました。しかしそれを、神の憐れみを受けた者、罪赦された者として、神を畏れかしこみつつ思い出しているのです。神が罪人にこの上もない寛容を示してくださる方で、私は今後信じていく者たちの手本になっているのだ、ということで思い出しているのです。

つまり、「うしろのものを忘れ」というのは、過去のことに囚われない、ということです。そして、人生にとって得であったようなものについても、過去に囚われれば、キリストへの信仰の前進の妨げになります。「私が何十年もかけて、これまでやってきたことが、この信仰の一步を踏めば無意味になるではないか？」と思うかもしれません。しかし、一步を踏むのです。キリストの知識のゆえに損とみなすのです。しかし後に、そのことが神の恵みによって用いられることがあります。私が過去にこんなことがあった、あんなことがあった、と健全ではない方法で思い出すことは、キリスト者の前進の妨げになります。

そして、私たちの思いは前に向きます。負のようなことが起こっても、それは実は前に置かれて

いる神のご計画のために必要なことであったことを信じながら、今、主が何を前に置いておられるのかを一心に求めるのです。ヨセフがそうでした。彼は兄に売られましたが、彼は目の前にあるエジプトをと統治することを一心に行ないました。そして、兄たちに売られたことが、後から振り返ると、ヤコブの家族を救うために初めに神が自分を遣わしたからなのだと知ったのです。主がこれから何をしておられるのか、前を向きながら、そして後ろで起こったことも前を向きながら見直します。ちょうどそれは、自動車の運転で、後ろはバックミラーを見ながら正面を見て運転することです。正面を見ながら、後ろを見ます。

「キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠」とあります。これは、キリストが戻って来られて、神が栄冠を与えてくださる時のことです。「20 節 私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。」とありますが、イエス様が天から戻って来られて、私たちを空中にまで引き上げ、それから報酬として各人に冠を与えられることを意味しています。今、この手紙の時はネロの前での裁判を待っているのですが、第二回目、再び捕えられた時は死刑になることが確定的でした。パウロはこうテモテに書いています。「2テモテ 4:7-8 私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現われを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。」義の冠が用意されている、と言っています。

ここで単に冠を受けるという行為に注目しては、意味があまりありません。そうではなく、主から義を賜る、報いを得るという意味です。イエス様は世の終わりについて話された時、タラントの喩えを語られて、「マタイ 25:21 よくやった。良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。」と言われることを教えています。主ご自身に会い、この方に受け入れられ、そして報いを受けるという、この一点に焦点が絞られていたのです。私たちには、目標があり、それが再来のイエス・キリストご自身にお会いすること、この方から報いを受けることなのだと知っています。

2B それぞれの到達点 15-16

15 ですから、成人である者はみな、このような考え方をしましょう。もし、あなたがたがどこかでこれと違った考え方をしているなら、神はそのこともあなたがたに明らかにしてください。16 それはそれとして、私たちはすでに達しているところを基準として、進むべきです。

パウロはここで牧会的配慮をしています。彼がいま話した、「上に召してくださる神の栄冠」について、同じ思いになることができるのは成人である者たちだ、ということです。つまり成熟した者たちということです。まだキリストにあって幼子は、そこまですっきりと、過去のものを忘れ、前に置かれたものに向かって進むということができないかもしれません。

先ほど話したことに矛盾するように聞こえるかもしれませんが、信仰に段階があります。それは、どれだけキリストに近づいた者になったのかという段階のことではなく、信仰による義の中に立つことができ、自由にされているかどうかという段階です。まだ律法による行ないの義などの影響から抜けきれていない段階があるかもしれません。そのような時には、「あなたがたがどこかでこれと違った考え方をしているなら、神はそのこともあなたがたに明らかにしてください。」と言っています。これはとても大切なことです、みなが一つになると言っても、全ての人が同じ考えができるわけではなく、もし違った考えを持っているなら、主がそのように明らかにしてください。

「私は、そこまで到達していない。どうしたらよいだろう？」と悩む必要はありません。自分の力で悟ることができるものではないのです。だから主が悟らせてくださるように願えばよいのです。そして大事なのは、「私たちはすでに達しているところを基準として、進むべきです。」とあるとおり、今、主に明らかにしていただいていること、そこから前に進めばよいのです。自分が立っているところを基準にして、主に語りかけを受け、前に進んでください。

2A 天にある国籍 17-21

そして 17 節から、パウロが非常に懸念し、悲しんでいるまた別の種類の異端の教えについて、注意を与えます。

1B 地上のことだけを考える者 17-19

17 兄弟たち。私を見ならう者になってください。また、あなたがたと同じように私たちを手本として歩んでいる人たちに、目を留めてください。

パウロが自分を手本にするように、またパウロたちを手本にしている人たちにも目を留めるように、と言っています。これは、パウロたちが宣べ伝えている福音というものが何なのか、彼らの生活の基準を見れば見ることができるかです。見せる信仰というのは、大切です。信じていることが一体何なのか、人々が手本にするものは教科書の中にあるのではなく、福音を信じている人々の生きている姿にあるからです。ある神学者が、自分がアメリカに博士号を取るために留学に行くにあたって、先輩が教えたのは次のことでした。「勉強よりも、アメリカのクリスチャン・ホームを見てきなさい。」そうです、私も実際に見て驚きました。幼い頃からキリストにあってしつけるその姿は、まず日本では見ることのできない光景です。そしてパウロたちは、信仰が若ければそれだけ、手本が必要であることを知っていました。それで、生活の中でどう生きればよいかを示していったのです。

18 というのは、私はしばしばあなたがたに言って来たし、今も涙をもって言うのですが、多くの人々がキリストの十字架の敵として歩んでいるからです。19 彼らの最後は滅びです。彼らの神は彼らの欲望であり、彼らの栄光は彼ら自身の恥なのです。彼らの思いは地上のことだけです。

主にあって喜んでいるパウロが、今はここで涙をもって話しています。それは救われるためには、イエスを信じることに加えて、割礼や律法を守らなければいけないとするユダヤ主義という異端が一方にあって、神の律法は度外視してよい、律法は無効にされたのだからと教える、無律法主義がありました。これもまた異端であります。パウロは、このことを宣べ伝えているというそしりを受けましたが、何度も何度も、断じてそうではないと否定し、罪に対しては死んでいる者であり、肉や情欲は十字架と共に付けられてしまったのだ、ということ。律法は破棄されたのではなく、キリストの死によって成就したのだという立場、そして今は、愛の律法(ローマ 13:10)があるということ。何でもやっていい、ということではなく、むしろこれらの罪と汚れから離れることができたのだ、という福音をパウロは宣べ伝えていました。

彼らが、十字架の敵であると言っています。なぜなら、罪と情欲のためにキリストが十字架に付けられたのに、神の恵みがあるのだから罪と情欲の中にいてよいのだという教えは、キリストが十字架に付けられたことを無意味なことにしてしまいます。救いは、行ないによってもたらされませんが、行ないのために救いは与えられます。聖潔という実を結ぶはずなのです。ですから、彼らがいくら「神」の名を使っても、それは彼らの欲望でしかすぎません。そして彼らに栄光が与えられる、クリスチャンとしての栄光が与えられるというのも偽りで、報いを受けない、恥が与えられるということです。

そして、彼らの思いが「地上のことだけ」とあります。このことについて、パウロはコロサイ人への手紙で説明しています。「コロサイ 3:5 ですから、地上のからだの諸部分、すなわち、不品行、汚れ、情欲、悪い欲、そしてむさぼりを殺してしまいなさい。このむさぼりが、そのまま偶像礼拝なのです。」こうした欲望で私たちは悩みます。しかし、悩みことこそが健全な信仰の現れです。それがどんなに出て来ても、聖霊に従い、祈り、御言葉にしがみつき、そして失敗したならば悔い改め、その営みを忘れないようにします。主は聖めてくださいます。

2B 栄光の体 20-21

20 けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。21 キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。

とても有名な聖句が出てきました。私たちは地上に属しているのではなく、天に属しているのですが、パウロは「私たちの国籍は天にあります」と言っています。ピリピという町が、ローマの植民都市であったことを思い出してください。そこで生まれた人は、生まれながらのローマ市民になることができます。ローマとは何かを示すモデル都市のような存在です。したがって、ピリピの人たちはローマ市民であることに誇りを持ち、自らそのために自分たちを捧げていった愛国的な人たちでもありました。したがって、ユダヤ人であるパウロが福音を宣べ伝えていると、唯一の神なので、

「ローマ人である私たちが、採用も実行もしてはならない風習を宣伝しております。(使徒 16:21)」
と言って、告発したのです。

そこでパウロはピリピ人への手紙で、「御国の市民の生活をしてください」(1:27 参照)と言いました。ピリピの人たちがそれだけローマに所属意識があり、仲間意識があったように、キリスト者は御国の市民であり、そこに献身しているのだ、仲間であり、自らキリストのゆえに自分を捨てて、互いにつながるものなのだ、と教えました。したがって天に国籍があるということは、いつも天を思っている、天の御座にキリストがおられることを思って生きるということです。それは個人的にもそうですし、教会としてもそうですし、世界的にも諸教会があって一つなのだという意識があります。

「主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。」とありますが、この出来事を詳しく描いているのがテサロニケ人への手紙第一 4 章です。「4:16-17 主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラツパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。」

そしてその時に、主が「万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださる」とあります。主が、終わりの日に万物を変えられます。被造物を元の意図に変えて、回復する力を持っておられます。そのことを行なわれる前に、神の子とされた私たちを確かに神の子として変えてくださるのです。新しく霊が生まれたのですが、体は未だアダムから受け継いだものです。それをキリストが戻って来られる時に、天によって造られる体へと変えてくださるのです。それは、キリストに似せた体です。神が初めてにご自身に似せて造られた、その体をキリストにあって与えてくださいます。「1ヨハネ 3:2-3 愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。キリストに対するこの望みをいただく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。」

この最後に、「自分を清くする」とあるように、この望みを抱いていれば、たとえ私たちが地上のものに引き寄せられても、主によって心が清められます。